資料　２－３－１

地元有識者へのヒアリング

1. ヒアリング対象者

屋久島山岳部の適正利用の基本理念やビジョンを考えるにあたり、屋久島の人の「伝統的な自然観」、「屋久島の人と自然との関わり」や、昭和 40 年代中ごろから約 20 年続いた「自然保護と開発をめぐる葛藤の時代に描いていた屋久島への思い」などを踏まえたものとするために、地元有識者にヒアリングを行った。

表　ヒアリング対象者リスト

氏名	ヒアリング実施日	所属	聴取項目
鎌田 道隆　氏	平成 29 年 1 月 16 日	奈良大学名誉教授	・屋久島の人の自然観、人と自然の関係について
長井 三郎　氏	平成 29 年 1 月 16 日	民宿「晴耕雨読」経営	・屋久島の自然保護の歴史について
大山 勇作　氏	平成 29 年 1 月 17 日	屋久島科学委員会委員	・屋久島の人の自然観、人と自然の関係について

2. ヒアリング結果の概要

本業務のヒアリングで得られた情報の概要を示す。「歴史を示す史料や史実」、「屋久島の人の自然観、人と自然との関わり」、「岳参りを含めた信仰心」、「集落の特性」、「山岳部（ヤクスギ）の利用」、「海域への経済的依存」、「自然保護活動当時の思い」、「これからの屋久島と観光」、などについての情報が得られた。ヒアリングメモについては本節３に示す。

表　ヒアリングでの特記事項

項目	ヒアリング対象者	特記事項
歴史を示す史料や史実	鎌田 道隆 長井 三郎 大山 勇作	・これまでの歴史から、屋久島にはあるとされている「原始的な精霊信仰」について史料や史実は残っていない。 ・屋久島の古い資料は失われてしまったので、「楠川古文書」だけが、屋久島の直接証拠として残されているだけだと思う。 ・屋久島の人が自然に対する畏敬の念を持っていたことを裏付ける確実な根拠としての史料や史実は残されていない。理念を作る際には、過去にあったことを文章化するだけではないので、新たに文章にして位置づけていくことも次の発展につながると思われる。
屋久島の人の自然観、人と自然との関わり	鎌田 道隆	・人間の営みは自然の営みの中に取り込まれており、人と自然は切り離されたものではなく一体化していたと考えられる。 ・人の自然観は「山そのものを神様」としており、神はどこにでも存在し、「人の住む世界」と「神の住む世界」を区別していた。その境界が牛床詣所ではないか。
岳参りを含めた信仰	鎌田 道隆	・山は恐ろしい存在であり神がいると信じ人間は一歩下

心	長井 三郎 大山 勇作	がってそれらを崇め奉っていたことが「精霊信仰」につながる要因だったと思われる。 ・集落と山は密接につながり、山は信仰の対象であると同時に、死んでから行く場所でもあった ・岳参りは山と集落が関係を持つ機会であったので、心の部分で山との付き合いはあった。 ・山への信仰心の象徴的なものとして、昔の人は朝起きたら顔を洗ってから山に向かって拝んでいたという精神的な面を持ち合わせていた ・現在では、山は生活の場ではなくなったので、心のよりどころだけになった。 ・仏教が屋久島に入って来た後は古来の山への信仰と仏教が共存体系をとっていたと思われる
集落の特性	鎌田 道隆 大山 勇作	・人々の生活や文化の基盤は集落だったが、集落間を結ぶ道がなく交流ができなかった。 ・屋久島に基幹道路が通る以前は、集落は独立国家のように成り立ち、集落間の交流や物資の移動は少なかった。
山岳部（ヤクスギ）の利用	鎌田 道隆 大山 勇作	・島津藩は山の財産が減少しないよう、山と海での作業量を命令していた。 ・集落から海岸までヤクスギは林立していたのではないか。集落から近い場所から伐って、切株は焚き木などに用いていたため、集落や海岸周辺にはヤクスギが生育していた痕跡がない ・ヤクスギは屋根を葺く「平木」のほかに、建材に使える「板木」や「船の帆柱」にも利用していた ・ヤクスギは船の帆柱にも利用されており、屋久島以南に位置する島々ではスギの自生がなかったため、屋久島が帆柱、大型船製造に使用される材の供給地となっていた。
海域への経済的依存	鎌田 道隆 長井 三郎	・暮らしの主たる部分は海に依存しており、海が中心の生活だった。山に入って働くためには林業の技術が必要となるため、漁業の方が手っ取り早く儲かった。 ・薩摩藩統治下時代では、ヤクスギ伐採、トビウオ漁、鰹節作りを強化しており、農業に対して振興策をとっていなかった。大半が山岳の屋久島では安定供給できない稲作よりも、海での採集のほうが豊富だった。
自然保護活動当時の思い	長井 三郎 大山 勇作	・自然保護活動で守った自然は自分達の世代では活用しなくてもいい次の世代に任せようという考え方を持っていたが、違う考え方の人もいた。 ・世界自然遺産登録では、小杉谷地区のように伐採してしまった箇所は遺産地域から外しているが、屋久島の負の遺産として取り込むべきだったと考える。 ・屋久島が遺産登録になれば伐採に歯止めがかかるという思いがあった。そして、屋久島が日本で最初に遺産登録される事は「日本で一番大切な自然」であることを伝えたかった。
これからの屋久島と観光	鎌田 道隆 長井 三郎 大山 勇作	・これからの観光のあり方のひとつとして、「人を通じて自然を語る」形態もとりいれることで、山を見るだけではなく、里の文化とつながり、自然だけでなく屋久島の

		人も観光資源になれるよう、島の魅力を世界に発信してほしい。 ・島民が失っている「山への畏敬の念」を取り戻して、屋久島のこれからはこうあるべきだと理念を示す事が重要である。 ・自然保護の活動をしていた当時は、ガイドという職業がここまで大きくなるとは思っていなかった。屋久島の自然で生業を立てているのだから、自然に負担を掛けないやり方を取り入れてほしい。 ・観光を縄文杉だけに頼るのではなく、観光に学びを付加させて、「学ぶ喜び」を感じてもらうことで、観光資源を安定させたい。 ・現状では、縄文ルートを含めて、どのような利用体験を提供したいのか決められないので人数制限もできない。 ・「超自然スーパーネーチャー屋久島」で「森・水・人」とのふれあいを出し、「屋久島文化村構想」では「自然と人との共生」を掲げているが、次にどのような事業展開をしていくのか出ていない。屋久島憲章は屋久島の原則を示したが、これからの方向性を見据えたものがないので、それを出してもらいたい

3. ヒアリングメモ

日　時：平成 29 年 1 月 16 日（月）15:00～18:30
対象者：奈良大学名誉教授　鎌田道隆
実施者：九州地方環境事務所屋久島自然保護官事務所　田中準 首席自然保護官
　　日本森林技術協会　高橋雅美

■　屋久島の人の自然観、人と自然との関わり

・屋久島は歴史的に見ても文化よりも自然の方が際立っている。そのため、人間も自然の一部として、人と自然とが共生している。
・人の自然観は「山そのものを神様」としており、神様はどこにでも存在するものと信じている。神様のいる場所を荒らさず、いつも山の神に接しながら生きてきた。
・「人の住む世界」と「神の住む世界」は区別しており、両者の境界には「牛床詣所」を作って、神と人の住む世界を棲み分けていた。
・古来からの自然観とは人間は自然に取り込まれており、人と自然は一体化していると考えられていた。

■　屋久島が山岳信仰に至った経緯と信仰心

・これまでの歴史から、人間は強くなく自然の脅威の中で、自然に抱かれながら生きて行くという「原始的な精霊信仰」をもっていたと思われるが、史料や史実としては残っていない。
・里から前岳、奥岳に入って行と、大きな木や岩が現れて危険な場所になってくる。山は恐ろしい存在であり、そのような場所には神がいるため人間は一歩下がってそれらを崇め奉る存在だったことが「精

霊信仰」につながる要因だったと思われる。
・近年の岳参りは「祠」を拝みに行っているが、もともとは山全体を神としてあがめていた。山に祠を祭らないと信仰心が欠けるように思われることを嫌って、祠を設置したといういきさつがある。
・集落ごとに岳参りする山は異なる。集落ごとの山へ岳参りすることは「集落の祈願」をするためであった。
・精神面でも集落と山は密接につながっており、死んだ人は山に登って神様になり、山の上から集落を見守り、時には集落へ降りてくると信じていた。このように、山は信仰の対象であると同時に、死んでから行く場所でもあった。
・旧暦 3 月 3 日は、潮が引いた時に、山の神様は海辺の潮に足をつけて元気になって山に戻っていく。人も神も一緒に遊ぶ日としていた。
・屋久島の山岳信仰は仏教よりも古く、仏教が屋久島に入って来た後は相互理解をしていたと思われる。このため、集落の年中行事は神仏融合になっている。

■　**集落の特性**
・自然発生的にできた集落は 100 戸程度と小さく、海岸沿いだけに集落が存在した。
・人々の生活や文化の基盤は集落だったが、集落間を結ぶ道がなく交流ができなかった。昭和に入ってからも隣村までは遠く、自由に行き来が出来なかった。

■　ヤクスギの利用
・集落周辺にもヤクスギはあったが、伐りつくした後は奥岳のヤクスギを伐るようになったのだろう。
・集落から海岸までヤクスギは林立しており、樹齢数百年程度だった。集落から近い場所から伐っていき、切株も焚き木などに用いていたため、集落や海岸周辺にヤクスギが生育していた痕跡がないのだろう。
・「ヤクスギ」は島の言葉として出てこない。江戸時代後期にヤクシマスギとしての「ヤクスギ」が出てくる。室町時代の日本語をポルトガル語に訳す辞書に「ヤクイタ」が出てくるが、屋根を葺くために使用されヤクスギで作った「ヤクイタ」は 50 年～70 年の耐久があった。
・ヤクスギは屋根を葺く「平木」のほかに、建材に使える「板木」や船の帆柱にも利用していた。これらは山の奥の木を利用しており、その手前の木は炭焼きに利用していた。

■　屋久島の農業、漁業
・昭和 13 年、14 年頃は農地開拓され田が増えたが、昭和 40 年頃から稲作はなくなってきた。稲作は屋久島の一部の集落では行われていたが、稲作以前または殆どの集落では焼畑で転作しながら作物を作っていた。以前は集落回り 1 里半にわたって「シカ垣」を作り、その中で焼畑をしていた集落もあった。江戸時代以前は麦、自然薯、ガジュツ等を作っていた。カライモが入ってきたのはもっと後。
・暮らしの主たる部分は海に依存しており、海が中心の生活だった。山に入って働くためには林業の技術が必要となるため、漁業の方が手っ取り早く儲かった。
・林業技術や道具がどこから来たのか、記録している文献が残っていない。

・楠川、栗生では仔馬のような「アシカ」が集落に入ってきて馬の餌を食べていたといわれている。「昔は海にアシカが生息できるほど豊かだった。また、島周辺にはサンゴや海藻が多く、多くの魚が産卵にきていた。当時の海が豊かであることは、山が豊かだったことになる。
・山、里、海のサイクルに人間の営みが組み込まれていた頃の暮らしについては、語りで現在に伝えられている。
・山での猟は、シカ、サルが対象だった。

■　これからの観光のあり方
・屋久島は自然観光一辺倒だった。観光とはすぐれたものを見るということ。レクリエーションや癒やしもいいが、それだけでいいのか。人間が作ってきた文化を見る観光も取り入れて、何をそこから学ぶのか考える事ができる。
・ガイドをはじめとする住民が島の魅力を語る事によって、自然と人間がどうかかわっているのか幅広く知る事ができる。
・これからの観光のあり方のひとつとして、「人を通じて自然を語る」形態もとりいれることで、山を見るだけではなく、里の文化とつながり、その価値観を伝えていくことにつながる。自然だけでなく、屋久島の人も観光資源になれるよう、生き方に誇りを持ち、島の魅力を世界に発信してほしい。
・島民が失っている「山への畏敬の念」を取り戻して、屋久島のこれからはこうあるべきだと理念を示す事が重要である。

日　時：平成 29 年 1 月 16 日（月）19:00～21:30
対象者：長井三郎
実施者：九州地方環境事務所屋久島自然保護官事務所　田中準 首席自然保護官
日本森林技術協会　高橋雅美

■　自然保護で活動していた当時の思い
・昭和 54 年の土面川流域および永田川河口域の山くずれ、土石流災害までは、山は遠いものだったが、これが引き金となって自然保護活動につながった。永田集落の人工林は人の手が行き届いていた林だったので、災害が発生するとは思ってもいなかった。そこで災害が起きてしまったことが大きい。
・屋久島には、縄文杉のロープウェイ、宮之浦のゴルフ場、一湊のヨットハーバー、水の輸出など事業計画がいくつもあったが、「屋久島を守る会」ではこれらの計画に反対して屋久島の資源を守り抜いた。そして、守った自然は自分達の世代では使わなくてもいいという考え方を持っていたが、違う考え方の人もいた。
・上屋久町は屋久町よりも伐採が先行していたので、伐採への危機感があった。屋久島でも、北と南で気候にも、感情にも温度差があった。
・世界自然遺産登録では、小杉谷地区のように伐採してしまった箇所は遺産地域から外しているが、屋久島の負の遺産として取り込むべきだったと考える。国立公園の区分については、白谷の 450ha は特別

保護地域に値すると考えていたが、第 3 種特別保護地域に指定したことから、今後も公園区域は見直していくべきである。「屋久島を守る会」では指定された保護地域の他にゾーニングをしたいという思いがあったが、実際には区分けしていない。
・保護運動では、基本的に現場を見に行く事をしていた。町民にも現場を見てもらうために、セスナをチャーターして上空から山を見た時もあった。
・「屋久島を守る会」の中でも、思想は統一していなく、保護へのアプローチもそれぞれであり、自然や人が多様な共存関係にあった。唯一、季刊誌「生命の島」が共通項であり、これが果たした役割は大きかった。

■　島民にとっての山岳部を含めた屋久島とは
・屋久島の古い資料は失われてしまったので、「楠川古文書」だけが、屋久島の直接証拠として残されているだけだと思う。
・島民の多くは、日々の暮らしと山との関係が希薄で、山がどのように使われているのか知る機会は少ない。昔は平木とりのために屋久杉が伐採され、今では観光で利用されているが、観光でどういう風に山が利用されているのかを自分の目で見て知ってる島民は少ない。
昔から岳参りは山と集落が関係を持つ機会であったので、心の部分での山との付き合いはあった。
・登山道整備により、木道や階段が設置されて本来の自然から離れてしまっているが、本来は登山道へは踏圧を軽減させるように人数制限をするべきである。
・屋久島に残されている資源には島民は気が付かないが、山・川・海と屋久島の子供たちが一番の資源だと思っている。現在は「山ん学校」開催で屋久島の自然を子供たちに伝えている。

■　屋久島の基幹産業となった観光について
・自然保護の活動をしていた当時は、ガイドという職業がここまで大きくなるとは思っていなかった。山岳部で問題となっているし尿については、山へお客を連れていくガイドが排泄物を管理するべきだと思う。ガイドがお客に排泄物は持ち帰ることを説明すべきである。屋久島の自然で生業を立てているのだから、自然に負担を掛けないやり方を取り入れてほしい。そして、外からきているガイドはよく勉強して知識を習得しているので、これからも集落というコミュニティーにどうかかわってくれるのか期待したい。
・遺産地域にふさわしい河川や川を残し、本来の自然の輝きを子供たちに伝えていきたい。また、里には文化的歴史もあるので、観光客だけでなく島民にも知ってほしい。

■　生活基盤としての海と山の利用について
・薩摩藩統治下時代では、ヤクスギ伐採、トビウオ漁、鰹節作りを強化しており、農業に対して振興策をとっていなかった。大半が山岳の屋久島では安定供給できない稲作よりも、海での採集のほうが豊富だった。現在でも月に 2 回は大潮があるので夜間に磯の物を採集しており、山よりも海の方が日常的に関わりの度合いが強い。
・戦後は水資源を活用しての重化学工業の島に移行する過程で、屋久島電工ができたが、それで終わってしまった。

日　時：平成 29 年 1 月 17 日（火）10:00～12:00
対象者：科学委員会委員　大山勇作
実施者：九州地方環境事務所屋久島自然保護官事務所　田中準 首席自然保護官
日本森林技術協会　高橋雅美

■　これまでの歴史を示す、史料や史実
・屋久島の人が自然に対する畏敬の念を持っていたことを裏付ける確実な根拠としての史料や史実は残されていない。理念を作る際には、過去にあったことを文章化するだけではないので、新たに文章にして位置づけていくことも次の発展につながると思われる。
・シドッチや鑑真が屋久島に上陸していくらかの影響をもたらたしたとあるが、史実が残されていない部分もある。
・日本から諸外国に行くルートとしては、種子島、屋久島を通ってその南をたどったとされている。そのため船の事故は多かった。

■　岳参り、信仰心について
・岳参りがどこの時代から始まったのか文献がないためわからないが、戦後からは把握している。益救神社がどこに位置しているのかも把握されていなかった事から、あまり深い信仰心がなかったのではないかとも思われる。戦時中の岳参りでは、戦地から無事に戻れることを願って山で祈った。
・山に対しての信仰心の象徴的なものとして、昔の人は朝起きたら顔を洗ってから山に向かって拝んでいたという精神的な面を持ち合わせていた。人は死ぬと山の高い所から西に帰っていくと信じられていることから、西を向いて拝む事につながっていると思われる。
・中学 2 年生で初めて岳参りに参加して永田岳に登り、鹿之沢小屋に泊まっていた。夜間は寒いのでシャクナゲ等の周辺の樹木を伐って燃やし、帰りにはシャクナゲの枝を束にして集落へ持って帰ったため、現在でも永田岳のシャクナゲは宮之浦岳よりも少ないと思われる。
・現在では、山は生活の場ではなくなったので、心のよりどころだけになった。
・山岳信仰だった屋久島に日蓮宗が入って、共存体系をとったのだろう。

■　ヤクスギの利用について
・ヤクスギは船の帆柱にも利用されており、屋久島以南に位置する島々ではスギの自生がなかったため、屋久島が帆柱、大型船製造に使用される材の供給地となっていた。
・樽づくりにもヤクスギを利用していたためスギ不足となり、島津藩が山からスギの苗を持ってきて植えていた。ヤクスギは江戸時代から生活を支えていた。
・ヤクスギは集落近くから伐採されていたため、その近辺では植林されていたが、その他では天然更新が早かったため植林はしていなかった。
・国有林野は時代の要請に応じて伐採もしてきたが、自然がよく残っている場所も国有林であることも

事実で、国有林が遺産地域になっている。林野庁の功績もあるとおもう

■　藩政時代からの生活基盤について

・屋久島の島津藩は島民の家系図を焼き払った。島民の生活は、白米を食べる程度の豊かさがあり、食料に困窮する事はなかったため、島民の島津藩への恨みなどはあまりなかったとされている。島津藩は山の財産が減少しないよう、山と海での作業量を命令していた。

・現在では、農業が基幹産業となることは現実的に困難であるが、地産地消程度が適していると思われる。

・屋久島に基幹道路が通る以前は、集落は独立国家のように成り立ち、集落間の交流や物資の移動は少なかった。屋久島憲法でうたわれている「国有林は地元住民の利益となるべき取扱をする」等が影響して沿岸林道（現・県道）が開通した。

・人々の生活は海と密接に関係があった。海岸沿いに家々が密集した集落は漁業集落だった。屋久島では山菜食がなく、また、植物の名前が付いていない、方言がないということがあり、日常生活面での山との関わりの少なさを現しているのではないか。

■　屋久島の環境保護運動について

・昭和 47 年に「屋久島を守る会」が発足した当時は、屋久島が遺産登録になれば伐採に歯止めがかかるという思いがあった。そして、屋久島が日本で最初に遺産登録される事は「日本で一番大切な自然」であることを伝えたかった。

・屋久島原生林伐採、石油備蓄基地誘致、ロープウェイ構想等に反対してきた保護活動期以降は、屋久島住民が自然保護との関わりが希薄になったが、屋久島はいくつもの保護地域が重なっており、他とは違う豊かさの原点があり重要であることを伝えていきたい。

■　観光地化した屋久島と、これからの屋久島について

・屋久島は観光が基幹産業として大きく育ったが、縄文杉だけに支えられた観光は転換期にきている。そのため、縄文杉は 100 人／日に限定して、登山道手前では研修を受ける、ガイド付きとする、料金を徴収する等の条件設定が必要と思われる。現状では、縄文ルートを含めて、どのような利用体験を提供したいのか決められないので、人数制限もできない。どの離島でも同じだが、細く長く島の自然を利用していく他に頼るものがない。ある程度は経済的に豊かにならないと、屋久島にとってより良いことが考えられないと思われる。

・観光を縄文杉だけに頼るのではなく、観光に学びを付加させて、「学ぶ喜び」を感じてもらうことで、観光資源を安定させたい。この「学ぶ喜び」を伝えることができるガイドには大きな役割があると思う。そして、島民自身が「屋久島は世界の宝」であることを誇りとし、「地球に残された自然」を大切にする心を持つことが必要である。また、屋久島は海、山、照葉樹林の多様な文化をつなげて伝えることができる島でもある。

・これまで屋久島では、「超自然スーパーネーチャー屋久島」で「森・水・人」とのふれあいを出し、「屋久島文化村構想」では「自然と人との共生」を掲げているが、次にどのような事業展開をしていくのか出ていない。屋久島憲章は屋久島の原則を示したが、これからの方向性を見据えたものがないので、そ

れを出してもらいたいが、住民の関心が低い事や、町行政や関係機関での考え方が違うのでまとまらず足並みがそろわない状況にある。